再掲　　塞翁が馬に乗った科学者

世木田 寛子

朝食が食卓に並んでいる。それぞれの部屋から家族が集まる。眠たそうな者や寒そうな者、皆が席に付くと一斉に食事が始まる。茶碗やお椀から湯気が立っている。皆それぞれにどこから手をつけようかと箸を動かし始める。そうして一日が始まる。どこにでもありそうな光景だが・・・。

ここで、不思議を感じて欲しいと言う人がいる。その人の名は寺田寅彦。湯気一つでも好奇心を持って観察すると地球を取り巻く空気や水の流れ、季節の仕組みと共通することが分かってくるという。そんな不思議が日常のあらゆるところにある。それを見つけ、興味を持って欲しいとつぶやいている。

これは、『赤い鳥』の中の「茶碗の湯」で彼が語っていることだ。小さい時から身近な現象をじっくりと観察する習慣が付いていると不思議なことをいっぱい見つける事ができ、科学が楽しくなる。それが彼の口癖であった。そんな寺田寅彦に私は、魅せられてもう数十年になる。

事の初めは、手にした随筆集『柿の種』にある。序に「棄てた一粒の柿の種　生えるも生えぬも　甘いも渋いも　畑の土のよしあし」というのが記されていたことだ。この本を手にした時、なんで柿の種なのだろう？と中を開かずに私なりに考えた。どんな魂胆があるのだろうかと結構な時間をかけたことが印象に残っている。

ふつう当たり前と思っていることにことごとく疑問を抱き、観察、実験、検証をしている。例えば、線香花火がカラマツカラマツパッパッパッと可愛く、ときに寂しく火花を散らす。そのしくみがどうなっているのだろうか。電車の混雑について待ち時間に関すること、火山や地震など、周期があるのか、予知はできないか。またそうかと思うと身近な藤の実などの植物のことなど広範囲に不思議が及ぶ。そしてそれぞれに彼なりに結論を出しているのだ。

その凄さに感銘を受け、どんな人物なのだろうと関心はそちらに向かっていった。

本をあさっていくと、彼の彼たるところが見えてきた。と、同時に知らない方が良かったと思えることも続出してきたのである。

彼が生まれたのは 1878 年（明治 11 年）である。それからの 57 年が生涯なのだ。それは私にとっては、祖父母の時代と合致する。社会的には大日本帝国憲法のもと中国等への侵出で、軍国主義の華やかな時であった。また、天変地異では洪水、火山噴火、火災、地震、凶作などが頻繁にあった。広島ではペストの流行があった（明治 23 年）。こうやって書き出してみると、方丈記の世界が浮かんでくる。

彼自身は、大病を何度もやっている。一回目の大病は小学校の時の肺尖カタルである。

この休学中に顕微鏡を買ってもらっている。それに夢中になり、それまで算数が嫌いで親も心配をしていたが、日々顕微鏡で遊んでいたことが、科学好きに傾いたきっかけとも取れる。

その後の大病は、大学生の時の肺尖カタルの再発での休学である。そして、それからは何回も押し寄せる胃潰瘍である。それらを抱えながら研究好きの彼は、大学での生活に憧れもし、全力を注いで研究に明け暮れていた。しかし大学というところは、やはり何かと思うようにいかないことが多いようだ。研究内容、研究費用、人間関係等々。体調のすぐれない時は鼻についてくる。理想とのギャップがあったりもするのだろう。そのたびに、恩師、夏目漱石のところを訪れ、教えを請うたり、俳句などで気を紛らわしたりして心を落ち着けていた。漱石も科学に興味があるので、彼と色々と話せる機会が出来、とても喜んでいた。そのバランスが取れているときは良かった。漱石が留学し、精神的に不安定なことが起こりだすと、気晴らしにならないことも増えてきた。漱石に頼るだけでなく、自分でも執筆作業に精を出すようになる。それを自分への癒しにすることが、ときに出来たようだ。

そのようにして調子がいいことも結構続いた。ドイツ留学の話も湧き、物理学の最先端を進みだしたりもした。しかし、あるとき素晴らしい論文を作成し、提出したものの、日本からのレターが届かないうちに西洋の学者の論文が到着し、栄冠を逃してしまったことがあった。その事件は彼には相当の落胆となった。遠くはなれた極東の日本では、西洋に太刀打ちできないことを身に染みて感じたようである。

それが元でやむなく物理学の最先端の研究の方向性を変えた。今、我々一般人が生活するのに重宝する身近な科学を生み出したのである。

日本の各地で起こる災害を重視し、警告を発したり、日常あらゆるところで見られる現象に視点を置いた物理学を、形成していった。彼からするとそれは諦めの境地に近いものもあっただろう。そして葛藤が渦巻いていたのだろう。それを鎮めるために「新しい帽子を買って嬉しがっている人があるかと思うと、また一方では、古い汚れた帽子をかぶって嬉しがっている人がある。」と言う言葉で自分に言い聞かせている。その心境が痛いほど伝わってくる。そういう中で、ますます胃潰瘍を抱える体になっていった。

いい時は、それなりに続くが、そうでないことも続く。尊敬していた漱石の死、妻の死が襲い掛かってくる。胃潰瘍は慢性化してくる。

そんな中、縁談が持ち上がってきた。彼にとっては、大きな助けになると考えられた。

その相手たる人物、その人の名は、紳。32 才。医者に嫁いだが、二人の子供を残して夫が亡くなり里に戻った。実家には親と妹がいる。妹は親を看るため結婚もせずにいる。そういうところに入り込んだという状態である。かたや寅彦は東大の教授、文筆家、恩賜賞までも授かっている。経済的には豊かであるといわれている。最近大きな家を新築した。

まるで下宿屋のように部屋数があるらしい。女中が二人いる。どう見ても願っても無いことである。その反面、姑、五人の子どもがいて、七人家族。本人は胃潰瘍。紳にとって大きな思案のしどころである。紳はどう考えたのだろうか。実家に、いつまでも世話になるわけにはいかない。私ならどうするだろうか・・・。紳は、この話に乗ることにした。

自分の子どもは婚家に残し、結婚した。紳はあっさりとしたやり手の女性だと聞く。それにしても、相当の決心がいっただろう。

でも、その結婚は正解だったと私は思う。それだけの強さを持っているようだし、そのくらいのことをやり遂げて欲しいと同じ女性として思うからである。

かたや寅彦のほうはどうか。申し訳ないという気持ちもあるだろうが、結婚に少々期待しすぎたところがあるようだ。彼自身、生来のものもある。紳は、割りきってわが道を進みだしている。それに対して、癇癪がよく起こる。胃にはよくない事はわかっているが、どうにもならない。気持ちのもっていく場所がないのである。漱石はもういない。当たるのは毎食後の茶碗くらいしかない。たとえそれを投げつけて割ったとしても、どうにもなるものではない。周りの者は、気持ちが動転したり、怖がったりするが、当の本人は、この癇癪を、茶碗を割りまくることで治まるのは、安いことだ、と言っている。また、紳のことを、悪妻と言いまわっている。なんということか。

しかし、紳はそんな寅彦になぜか死ぬまで付き添っていた。この事実をどう解釈すればいいのだろうか。

寅彦はそういう自分の人生をどう捉えているのだろうか。

現代を生きる我々が、その生涯を見つめた時、気の毒なところも多いが、そのために彼が軌道修正をしたことが、今の時代にかけがえの無いものをたくさん授けてくれたように思える。

寅彦は、文筆家としても物理学者としても天才的存在という地位を持っている。人間というものさしで計ったらどうだろう。そこには、そんなものさしはいらないのだろうか。

いろいろな角度からこうして彼を見つめていくと「人間万事、塞翁が馬」と言う言葉が浮かんできた。

大病をしたことが、彼を立ち止まらせたようにも思える。

日本という狭く、しかも地球の端にある国に生存していると言うことや、大病による休職で、仕事から離れさせられたこと、家庭的に満足出来ない環境に置かれていると思っていることなど、それが、上手く機能したのではなかろうか。酷い言い方だが、そのことで自分を諦めると共に、切り替えられたと考えられる。時間が保障され、身の回りの事柄に目をやることができ、それが文学作品になるのである。

もう一つは、体力的に自信が無いので、研究のために、外国に出かけることが出来ない。そのために、ノーベル賞を貰い損ねた過去があるだけに、物理学と言っても世界最先端の

原子物理学などではなく、身近な生活の中の物理現象の解明に、研究の視点を置くことに決心できたのだろう。

どちらにしても、誰にも怪我の功名があるわけではない。やはりそこには、彼の現実に、自分の置かれている状況の判断の凄さと好奇心があってのことである。そして、それに向けての切り替えの決断力も大したものと言えよう。そういう面では、やはり天才的存在と言うのも当たっていると思える。

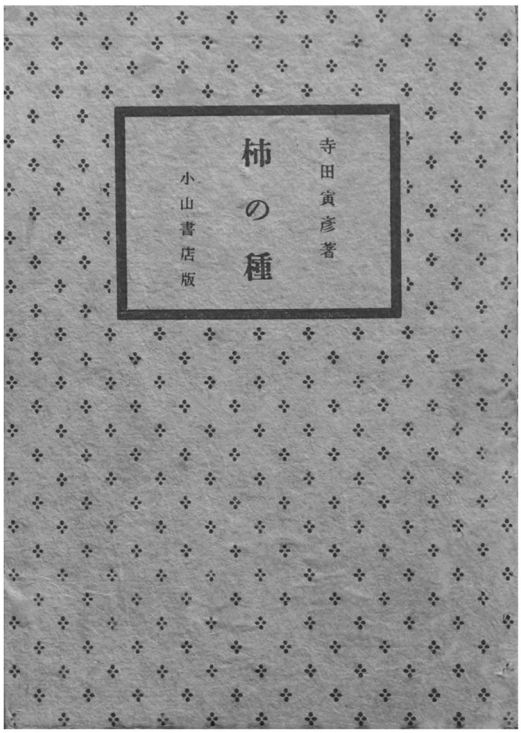
また、社会や政治経済に、極力関わりあいを持たないようにしていたことも、彼が為したいことの速度を妨げないで済んだといえるのではないだろうか。

「人間万事塞翁が馬」と言う言葉がまた、浮かんできた。

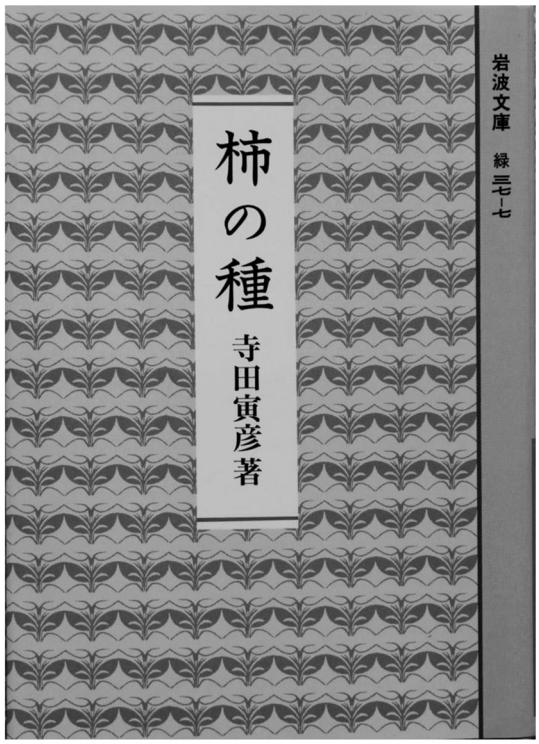
当時と比べると、医学の進歩、交通網の発達、安定した社会など、百年後の現在に、もし彼が生きていたら、どんな人生を送っただろうか。

やはり天才的な人間として、人は評価するだろうか。

『函』73 号（函同人会、2021 年 11 月 1 日発行）掲載



『柿の種』箱
（昭和 8 年、小山書店）



『柿の種』表紙
（1996 年、岩波文庫）